

## 書 評

### Cora Kaplan, *Victoriana: Histories, Fictions, Criticism* (Edinburgh: Edinburgh University Press, 2007)

平林 美都子

*Victoriana: Histories, Fictions, Criticism* (Edinburgh UP, 2007) の著者 Cora Kaplan は、*Aurora Leigh and Other Poems* (The Women's Press, 1978) の編者として、さらにその啓発的なイントロダクションによって名前を上げた。マルクス主義フェミニストであるカプランは *Aurora Leigh and Other Poems* のイントロダクションで、現代人がヴィクトリア朝に取り付かれていること、「階級、ジェンダー格差が恥ずかしげもなく表現された」「ヴィクトリア朝文学への欲求」(36) があることを指摘している。*Victoriana: Histories, Fictions, Criticism* においてカプランは、ヴィクトリア朝の小説や文化的アイコンに現代人がなぜ今なお引き付けられているのかを分析したが、彼女の問題意識の萌芽はすでに30年前に芽生えていたのである。

1960年代後半、フェミニスト運動の隆盛と脱植民地化の結果からヴィクトリア朝に対する新たな関心が芽生えてきた。そして、それ以後、ヴィクトリア朝小説の映画化や実在人物を登場人物にした虚構の小説など、ヴィクトリア朝を再現・再創造された作品が流行している。Jean Rhys の *Wide Sargasso Sea* (1966) や John Fowles の *The French Lieutenant's Woman* (1969) はその先駆けとなる作品である。Dana Shiller が<sup>8</sup> neo-Victorian novel (“The Redemptive Past in the Neo-Victorian Novel”, *Studies in the Novel*, 1997) と名づけたこうした小説に関する研究書は、Suzanne Keen による *Romances of the Archive in Contemporary British Fiction* (U of Toronto, 2001)、John Thieme による *Postcolonial Con-Texts: Back to the Canon* (Continuum, 2001)、Jeanette King の *The Victorian Woman Question in Contemporary Feminist Fiction* (Palgrave,

2005) など、すでに多数出版されている。確かに *Victoriana: Histories, Fictions, Criticism* はこれらの研究書と重なる部分があるだろう。しかしカプランの関心は作品そのものというよりは、ヴィクトリアーナ、すなわちヴィクトリア朝文化に対する現代人の執着心であり、その問題意識は一貫している。彼女はヴィクトリア朝への執着心がノスタルジックな感傷からだけでは説明できないと考え、「我々が『歴史』として知っているもの[ヴィクトリア時代]は概念的なノマドとなり、絶えず変化して落ち着くことがなく」(3)、執着心は過去への我々の思いが常に変化していることの徴候だと論じる。「階級、ジェンダー、帝国、人種への関心」に加えて、「ヴィクトリア朝について書くことや読むことに伴う深い情緒」(5)に興味を持つカプランは、リメイクされた文学作品のみならず、ヴィクトリア朝作品の批評も分析し、現代人の徴候にメスを入れるのである。時折、彼女の話は自分の個人的体験へ流れることもあるものの、それによって議論が散漫になることはなく、むしろヴィクトリアーナの一つの例として読者を納得させてくれる。

本書は4つの章から構成されている。第一章は、“*Heroines, Hysteria and History: Jane Eyre and her Critics*”と題され、20世紀の批評が1840年代の女性作家の作品をどのように改訂したのかを論じる。カプランは、ヴィクトリア朝への執着心をフロイトのヒステリー患者と類似的にとらえることで、過去の文化的産物を強迫観念のようにリサイクルしていると言い、「記憶のシンボル」である『ジェイン・エア』の批評史をたどる。彼女はまず、Virginia Woolf と Raymond Williams という批評的立場の異なる二人が、いずれも『ジェイン・エア』の中のBronte自身の感情的な声に反応していることを明らかにする。都会のエリートであるウルフによれば、ジェイン/Bronteの主體的・怒りの声はストーリーを中断するものであり、女性による近代小説の可能性を阻むことになるのだ。30年後、労働者階級出身のウィリアムズは、Bronteの願望は一般人の願望だとしてそこに近代小説の要素を認めながらも、現代の読者のジェンダーを考えれば、女家庭教師の「絶望的イメージ」には問題があると結論づけた。

その後、Elaine Showalter、Sandra GilbertとSusan Gubar、Nancy Armstrong、Gayatri Spivakらの『ジェイン・エア』批評が俎上に載せられていく。カプランの狙いは「批評も、想像的文学作品のように感情的な歴史を持つものとし

て議論」(25)することである。本書の第一章の締めくくりは、Paula Rego が描いた『ジェイン・エア』の挿絵の分析である (*Jane Eyre*. Introduction by Marina Warner, Enitharmon Editions, 2003)。 *Victoriana: Histories, Fictions, Criticism* の表紙絵にも使用されていることから、カプランがレゴの描く(解釈する)ジェインに啓発されたのは間違いないだろう。レゴのジェインはすべて成人女性の姿で、ときにはバーサを髣髴させる像を描いていく。カプランによれば、レゴのジェイン像は『ジェイン・エア』という記憶のシンボルが問題を孕み、テキストと読者(批評家)との間で喚起される感情が浮遊し続けることを物語っているのである。

続く“*Biographilia*”は質量ともに本書の中心となる章である。*Biographilia* は *Biography*(伝記)と *philia*(病的な愛好)を合体した造語だ。ここでカプランは、20世紀後半の伝記の流行に分析の目を向ける。1960年と70年代には、バルトやフーコーがそれぞれの批評的立場から「作者の死」を宣言したが、1990年代からポストモダニズムへの反発から「抑圧された主体・作者の回帰として、(作家の)伝記の再評価が行われた」(40)とカプランは説明する。フェミニストたちによる女性作家の発掘のプロジェクトは、ヴィクトリア朝の男性作家への新たな関心を引き起こした。しかし、ここで扱われる「伝記小説」は、A.S. Byatt の *The Biographer's Tale* (2001) で明らかにされるように、「心理面、社会面、言説面で非決定性の網の目」(44-45)に捕らわれた作品、いいかえれば、事実とフィクションの混合(バイオフィクション)である。Peter Ackroyd の *Dickens* (1990) が取り上げられるのもそのためである。カプランが「アクロイドのおべっかめいた口調の中に[ディケンズを]ライバル視するサブテキストの音がざわめいている」(57)と言うように、『ディケンズ』の分析で明らかにされるのは、アクロイドがいかにディケンズに捕らわれているのか、という点である。伝記作家としてのアクロイドは、読者よりもむしろディケンズの関心を引きたいのではないかとまでカプランは言う。

第三章の“*Historical Fictions: Pastiche, Politics and Pleasure*”では4人の作家(John Fowles, A.S. Byatt, David Lodge, Sarah Waters)の小説が分析される。その中で、バイアット、ロッジ、ウォーターズに共通しているのは、現在の大学の英文学部がプロット上あるいは創作の方法に深く関係していることである。しかし、ヴィクトリア朝を扱った小説の創作方法がいかなるものであ

れ、こうした小説には「読者の情緒的反応を生み出すようなものへの言及」(115)があり、カプランの関心は読者へ向かっていく。そして彼女はバルトの『テキストの快楽』の「時代錯誤的な主体」を持ち出し、二重に引き裂かれ、二重に倒錯する「時代錯誤的な主体」こそ、こうした小説にふさわしい読者だと論じるのである。このあたりのカプランの議論はやや強引にみえるかもしれないが、ヴィクトリアーナの徴候を検証する彼女にとって、必然的な展開だといえよう。

ヴィクトリア朝を再現した作品の最後の例として、第4章では Jane Campion の *The Piano* (1993) が取り上げられている。『ピアノ』はすでに多くのところで批評され、カプランの議論そのものもとりたてて目新しいものではない。しかしヴィクトリアーナへの彼女の関心はぶれることがない。カプランは『ピアノ』を現代におけるヴィクトリア朝のリサイクルとしてとらえ、Peter Brooks のメロドラマ論に依拠し、映画に見られるヴィクトリア朝の執拗なりサイクルは一種のヒステリー徴候のメロドラマと捉えることもできる、と説明する。

本書の各章はそれぞれが独立しているため、文献一覧がないという不満も残る。しかし、だからといって本書の価値が下がるわけではない。カプランのヴィクトリアーナの分析は緻密で一貫性がある。本書を読み終えた今振り返ってみれば、現代人のコンテキストからヴィクトリア朝の時代・文化を批評する我々ヴィクトリア朝研究家は、創造的な書き換えをする小説家や画家と近いといえるかもしれない。バルトの言う「時代錯誤的主体」となりながらヴィクトリア朝へ魅了され続けるのは、我々に共通する徴候ともいえるのだろう。本書は副産物として、そうした現在の批評的土壌を検証することの必要性を我々に考えさせてくれるのである。